特集：「令和の日本型学校教育」の構築をめざす教育実践の可能性

「令和の日本型学校教育」の構築をめざす学校への挑戦
―天童市立天童中部小学校での取り組みを通して―

小　幡　　肇（文教大学教育学部）
大　谷　敦　司（山形市立鈴川小学校）

Challenges Faced by Schools in Aiming to Establish
'Japan-Specific School Education in the Reiwa Era'：
Based on Approaches Taken by Tendo City Municipal Tendo Chubu Elementary School

OBATA HAJIME, OHYA ATSUSHI
(Faculty of Education, Bunkyo University)
(Yamagata Municipal Suzukawa Elementary School)

要　旨

天童市立天童中部小学校は、「４つの授業スタイル」の構築を通して、「令和の日本型学校教育」の構築をめざす学校への挑戦を始めた。その指導にあたった大谷は、「子どもがする授業」の実現に向けて、「自学・自習」、「ＭＰ学習」、「ＦＳＰ」と順次、開発を手がけつつ、その成果を確かめながら挑戦を続けてきた。そこには、「一人一人の子供を主語にする学校教育の姿」、「『子供たちを支える伴走者である教師』」、「学校の『居場所としての福祉的な役割』」等が確認できる。そして、今後、「学びは『個』のものであるという教育観の理解や『個別最適な学び』と『協働的な学び』の適切な実践」が日本の教育界で行われるようになることが望まれる。そこから「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識し、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるような資質・能力の育成」が実現すると考える。

キーワード：個別最適な学び、協働的な学び、子どもがする授業、自学・自習、マイプラン学習、フリースタイルプロジェクト

１．はじめに

⑴「令和の日本型学校」の評価すべき点

守屋淳は、「『令和の日本型学校』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現～」について、学校教育の現状分析と今後の方向性が示され、「明確な意志をもって、日本の学校教育を改革していきたいという意図が感じられる」と述べる[1)]。そのうえで、評価すべき点として、以下のことを指摘する。

・「一人一人の子供を主語にする学校教育の姿を描」き、「子供たちを支える伴走者である教師」と教師の役割を定めている。
・学校の「居場所としての福祉的な役割」を強調している。
・「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続

可能な社会の創り手となることができるような資質・能力の育成」に着目している。

・「正解の暗記に偏った授業を変革し、学校内に同調圧力を感じないですむ開かれた関係性を築き、他者と協働できる自立した学習者を育てるという方向性を目指している」ことが確認できる。

⑵「令和の日本型学校」の批判的に検討すべき点

守屋は、「個別最適な学びに連なる理論的言及や実践」は「百年以上前から様々なかたちで存在している」という奈須の言をもとに、以下のことを述べる[2)]。

・「『指導の個別化』『学習の個性化』」は、「『オープンスペース』と呼ばれる実践として知られた、愛知県東浦町立緒川小学校で用いられた概念」である。「教師によって準備された『学習の手引き』に子どもが取り組むべき課題が示され、その学習の方法（参照すべき）教科書や資料集のページ、学習カードの番号等がいくつか指示してあり、子どもは一定の時間数の中で学習を終了するよう、どの方法で、またどの順番で学習するかを選択し、自分のペースで学ぶ」といった、まさに「『個別』で『個性的な』学びを成立させようとする実践」がある。

・「大正自由教育の実践校として知られる奈良女子高等師範学校附属小学校『現奈良女子大学附属小学校』の実践」に見る、「『独自学習』→『相互学習』→『独自学習』のサイクル（教師によって示されたテーマを各自がまず独自に学習し、学習が深まった段階でお互いの学んだ結果の交流を行い（相互学習）、さらにそこで気づいた疑問点についてまた各自がそれぞれ独自の学習を深める）が、まさに『個別最適な学び』と『協働的な学び』の適切な組み合わせとなっているという」奈須の主張がある。

・佐藤が主導する「『学びの共同体』の授業」では、「学びは『個』のものであるとし、どの子にもある学ぶ権利を保障するためにグループを活用」し、「こども同士の学び合う力を利用するという考え方に立つ。そして、「ヴィゴツキーの『発達最近接領域』の概念に言及しつつ、他者の助けを借りて一人では到達できない高みに到達するのが学びの本質である」と主張する。

以上のことから、守屋は、「学び合う場では、異質な考えが交わされ、響き合い、想定を超えた発見や認識がもたらされ、そこに学ぶ喜びが生まれる」とし、「『個に応じた指導』が示すような『個』を大切にするという教育観と、『個別』たる概念は相容れない」と指摘する。そして、「個」の学びなのか、「個別」の学びなのか、また「『最適』を決めるのは誰なのか」を問う必要があると指摘する。

２．天童中部小学校の取り組み（その１）

では、実際に、小学校現場では、どのように「令和の日本型学校教育」の構築をめざす学校への挑戦に取り組んでいるのだろう。そこで、天童市立天童中部小学校の取り組みについて見てみよう。筆者（大谷）は、学校長として、その指導にあたった[3)]。

⑴「子どもがする授業」に向けて

中央教育審議会答申では、「令和の日本型学校教育」の実現に向けて、これまでの日本型学校教育のよさを受け継ぎながらもさらに発展させ、2017年度版学習指導要領の着実な実施に向けて、授業において「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実することの重要性を示している。先行き不透明とされる未来を切り拓き、「誰一人取り残さない持続可能で多様性と包摂性のある社会」（国連サミット「持続可能な開発のための2030アジェンダ」、2015）を創っていく子ど

もの資質・能力を育成するために必要であり、特に、自己肯定感を高め学びに向かう力の醸成を図る上で重要な手立てと考えられる。

こうした理念を実現するのは、一つ一つの学校である。天童中部小学校では、「現在はもちろん、将来も子どもたちが幸せにくらすことができるように支援する」ということと、「子どもたちが、将来的に、私たち教職員のいないところでも学び合うことができるように支援する」ということを合言葉として、教育活動に取り組むこととした。

そこで、何よりも、学校の教育活動の柱である授業を、教師主導ではなく、子どもたちにとっての自由度を高めようと試みた。

つまり、子どもが、自分に合った学び方で、学習に取り組み、自立した学習者に育つことを支援しようと考えたのである。そのため、校内研究のテーマを「子どもがする授業」とした。

授業は、元来、子どもの学びを教師が支援するものである。そして、授業そのものは、「子どもがする」ものである。

しかし、日本の教育は、明治の学制公布以降、教師が授業を主導し、子どもはそれに従う、という他律的教授学で展開してきた。そのため、授業は「教師がする」という傾向に陥っていたのではないかという反省から生まれたテーマである。

こうした流れから「子どもがする授業」に向けて取り組んできたことを、以下に述べる。

⑵「自学・自習」への取り組み

まず、取り入れたのは「自学・自習」である。子どもたちだけで通常の授業を行うことを、天童中部小学校ではそう呼んでいる。学習係が教師役となり、授業を進め、板書も子どもが行う。

事前に、授業のねらいやおよその進め方を、教師と相談したり自分たちで話し合ったりし、教師が通常行う教材研究に準じることをして授業に臨む。終わった後で、学び方に焦点を当てて授業を振り返る。

自学・自習は、出張や研修等で教師が教室にいない場合と、教室内に教師がいる場合の二通りがある。教師が教室にいる場合も、子どもたちが進めている授業には、原則的に途中で介入することはしない。それをすれば、結局は教師を頼りにし、自分たちだけで学ぶことにつながらなくなる。

自学・自習において、子どもたちは、その教室で、担任が普段行っている授業を再現する傾向がある。すると、教室内で自学・自習を観ている教師は、自分の授業の癖や課題に気づくこととなり、授業改善に向けた有意義な研修の場となる。

また、単元のどこに、自学・自習を組み込めば、学習効果が高まるのかを考えることで、単元の構想や計画を練る力が向上していく。

⑶「自学・自習」の導入の目的及び変容

この学習形態を取り入れた最も大きな理由は、子どもの意識（授業は教師が計画し進めるもの）を変えるためである。そこから、学習に対する受動的な構えからの脱却を目指したのである。

導入を検討した際は、教師側にも不安があり、「子どもたちだけで授業を進めることは本当に可能なのか」、「浅い学びになるのではないか」という声は多少なりともあった。

そこで、先行実施している学校で取り組んでいる様子を参観したり、研修に参加したりした。そして、天童中部小学校でも実施は可能であることを説明し、まずやってみようと呼び掛けた。

始めてみれば、「子どもがする授業」による子どもの変容は教師の予想以上であった。

一年生担任のＡは、「一年生なのにあんなにできるとは思ってもいなかった。子どもには素晴らしい力があると改めて見直した」と、職員室で述べた。繰り返し取り組んでいくう

ちに、Ａと同じような思いを抱く教師が増えていった。学校を回っている際、自学・自習をしている学級で「すごいね、先生がいなくても授業ができるんだね」と話しかけると、「いつもやってるよ」という答えが返ってくるようになった。

教師との打合せの後、休み時間に学習係だけで特別教室に集まり、次に担当する授業で思考ツールを使いながらどんな板書にするのかを話し合っている姿にもよく出会った。子どもたちだけで学び合うことが特別ではなく、どの学年・学級でも当たり前になっていった。

子どもが確かに変容するという手応えを得られれば、教師の取り組みは積極的になる。

こうして、授業は「先生の計画で先生が進めるもの」から、「自分たちでも進めることができるもの」へと、子どもの意識が少しずつ変わっていった。ただし、それは自分たち、集団・みんなで学ぶことであり、個・一人で学ぶことではない。

そこで、次の段階として、個・自分一人でも学ぶことができるという意識を高め、そうした力を伸ばすために、自学・自習の導入から約一年後にＭＰ学習を取り入れた。

３．天童中部小学校の取り組み（その２）～ＭＰ（マイプラン）学習

⑴導入に当たって

ＭＰ学習とは、単元内自由進度学習の天童中部小学校独自の呼び名である。導入を検討するにあたり、短めの単元内自由進度学習を６年生が試行した。終了後は、子ども・教師共に「本格的に取り組みたい」という反応だった。そこで、六年生の子どもたちにネーミングを依頼し、この名前に決まった。ネーミングの理由を尋ねたところ、「この学習は計画（プラン）がポイント」で「自分で自由に計画したり変更したりできるのが魅力だから」ということであった。

原則として、各学年が学期に一つずつ（一年生のみ二学期から開始）単元を立ち上げる。特別支援学級も含め全学年で実施した。なお、特別支援学級については、子どもたちが在籍する学年の単元で学ぶ場合と、独自に作った単元で学ぶ場合の二通りがある。

学期に一つとなるのは、準備にある程度の時間がかかることによる。年間指導計画を作成する際に、年度のどの辺りでどんな教科を組み合わせて単元を作るのか予定はしておくものの、具体的には、子どもたちの学びの実態を見た上で単元の構想を練っていく。そして、準備は長期休業も活用しながら進める。

二学期と三学期は、学校全体でMP学習に取り組む時期を凡そ設定している。学校中の雰囲気が変わり、少しずつ整っていく学習環境を見ながら、子どもたちは「次は〇〇を勉強するみたいだね」などと話しながら廊下を歩いている。教師も校内を意図的に回ることが多くなり、他学年等の学習環境を見て刺激を受けたり、職員室で教え合ったりする姿が見られた。経験の浅い教師がベテラン教師と一緒に教材研究をしながら指導を受けたり、ベテランの教師が若手教師からＩＣＴの効果的な活用について支援を受けたりすることがあり、ＯＪＴの活性化にも結び付いていた。

ＭＰ学習は、基本的に二つの教科の単元を組み合わせて一つの単元を作る。一つの単元は二教科分を合わせて15時間程度である。合科とは異なり内容をすり合わせるのではなく、各教科の単元を並走させていく。学ぶ内容は教師によって予め決められているが、学び方（順番・ペース・軽重の付け方・場所等）は子ども一人一人が決めることになる。

自由進度学習について、佐野亮子は「自由進度学習は、換言すれば『教師が直接的に教えない授業』といえる。学校での教育活動において教師が教えない授業はあり得ない。しかしながら、授業は、一斉授業のように、教師が直接的に子どもに関与することが大きく前提としてあった。自由進度学習は、その前

提をなくし、子どもが自力で進める授業である。

したがって、授業の様相も教師の指導の在り方も従来の一斉授業とは大きく異なっている。」と指摘している[4)]。

当然、教師が何も指導しないわけではない。単元のめあて・学習内容・標準的な時数・基本的な流れ・該当する教科書のページや学習プリントの番号・他に活用可能な教材等を記載した「学習の手引き」を作成し、学びの地図として子どもたちに示す。教師が学級の子どもたちへ一斉に指導できるのは手引きの説明までで、そこから先は子どもが自分で計画を立て学習を進めていく。資料１は、ＭＰ学習として設定した「理科　じしゃくのふしぎ」の学習の手引き（８時間）である。

マイプラン学習　理科「じしゃくのふしぎ」　学習の手引き（8時間）

単元の目標

① じしゃくを身の回りのものに近付けたときの様子をひかくしながら、じしゃくのせいしつについて理解することができる。
② 理科の器具を正しくあつかいながら、けっかをまとめたり、同じところ・ちがうところに着目してけっかからわかることを考えたりすることができる

学習のながれ

	学習のながれ	教科書	ワークシート 提出箱
1	じしゃくにひきつけられる物・ひきつけられない物	148ページ～	ワークシート①
2	じしゃくと鉄のきょり	151ページ～	ワークシート②
3	じしゃくが鉄を引きつける強さ	153ページ	ワークシート③
4	きょくのせいしつ	153ページ～	ワークシート④
5	じしゃくと鉄	157ページ～	ワークシート⑤
6	じしゃくをつかったおもちゃをつくろう	じしゃくのところ	ワークシート⑥

↓

チェックテス

おわった

↓

チャレンジ学習

【資料１】

⑵学びの姿

同じ場所で学んでいても、それぞれの計画で学んでいるため、隣に座っている仲間とは異なる教科に取り組んでいることもある。それでも、みんなが一緒に学んでいるという雰囲気・環境が、子どもたちの学びを後押ししている。同じ空間で、仲間が各々学んでいるからこそ、自分も安心して自らの計画・ペースで学びを進めることができるのである。

【写真１】

例えば、理科の実験をするにしても納得できるまで一人で取り組むことができる。Ａさんは、おもりの学習で、数個の重りセットを持ってきて様々な場所につるしたり数の加増を何度も繰り返したりして実験していた。

こうした中で、教材に書かれていた「つりあう法則」を自分なりに納得していった。子どもが学ぶ際は、教師にとっては理解しがたく一見遊んでいるのではないかという活動もある。ＭＰ学習では、こうしたことにも自分の計画で、時には事前の計画を変更してまでも納得するまで一人で取り組むことが可能になる。

【写真２】

一方で、学びを進める中で一人では克服できない困難に出会ったり仲間の助けが必要だと考えたりした際は、自然に仲間と話し合ったり協力し合ったりする姿が見られる。そして、納得すれば、また自分の学びに戻っていく。必要な時に仲間と学び合い、納得すれば一人学びに戻る姿が見られるか否かが、ＭＰ学習が子どもたちにとって適切な学習になっているかを評価する視点の一つとなる。

特別支援学級でもＭＰ学習に取り組んでいる。特別支援学級の子どもについては個別の支援計画があり、日頃から個に応じた指導が通常学級以上に為されている。しかし、それらは教師が作成したものである。ＭＰ学習では、子どもが自らの計画を立て修正を加えながら学びを進めていく点に意味がある。

⑶子どもの評価

ＭＰ学習に係るアンケート調査を、グーグルフォームを活用し導入初年度末に実施した。ＭＰ学習には全校生が取り組んでいたため、アンケートの対象も全校生（667名）とした。

その結果は、以下の通りである。

◇「**子どもへのアンケート**」より
① MP 学習は楽しかったですか。
・楽しく学ぶことができた・・・・・・・・・・61%
・どちらかといえば楽しく学ぶことができた・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31%
・どちらかといえば楽しく学ぶことができなかった・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5%
・楽しく学ぶことができなかった・・・・ 3%
②（「どちらかといえば」を含めて）楽しかった理由は何ですか。（複数回答可）
※理由として挙げられた上位４位までは以下の通りである。
・自分のペースで学ぶことができたから・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・65%
・自分の計画を立てることができたから・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46%
・仲間と学び合うことができたから・・・38%
・自由に動きながら学ぶことができたから・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37%

９割を超える子どもたちがＭＰ学習は楽しいと感じている。その理由として、自分で計画を立て、自分のペースで、自分の好きな場所で学習に取り組み、必要に応じて仲間と学び合うことができることを挙げている。

「自分でする授業」の質が、また一段階高まったと感じた。しかしながら、まだ学ぶ内容は教師によって予め決められている。そこで、ＭＰ学習を導入した半年後、学ぶ内容も自分で決めるＦＳＰを取り入れた。

４．天童中部小学校の取り組み（その３）～ＦＳＰ（フリースタイルプロジェクト）

⑴導入に当たって

「ＦＳＰ」、一般的に個人総合・個人探究などと呼ばれている学習の天童中部小学校独自の呼び名である。導入にあたっては、まず教職員向けの研修会を開き理解を深めた。その後、子どもたち向けの説明会を開き、こうした学習に取り組んでみたいかを尋ねた。実施が決まった後で、ネーミングを募ったところ、本案が６年生から出された。ネーミングの理由を尋ねたところ、「学校で、自分がやりたいことにじっくり取り組むことができるワクワク感を出した」ということであった。

ＭＰ学習は、学ぶ計画や学び方は自分で決めることができるにしても内容は教師によって決められていたが、ＦＳＰでは学ぶ内容も自分で決めることになる。自分のくらしを振り返ったり自分でも意識していなかった自分の興味・関心に気付いたりしながら、取り組む内容を決めていくが、大変難しい。担任も、日記などで日々の生活の様子をつかみながら、子どもたちと相談を重ねていく。こうして決まっていく内容は、絵画の作成・作詞作曲・各種研究・スポーツ等と多種多様だった。ノートパソコンを分解し仕組みを学んだり、世界の切手を学びオリジナルの切手のデザインをしたり、将来就きたい職業を考え調べたり、好みの香りを作ったりする子どももいた。ＦＳＰの時間は、

教師も自分のテーマを決め、子どもたちと同じ空間で一緒に活動する。教師も自分たちと同じように活動していることが、子どもたちにとっての「学ぶ環境」になると考えた。

年度に二回実施し、一回の時数は20時間である。特別支援学級も含め、四年生以上のすべての学級で実施した。活動の全体計画や留意事項は教師側と子どもたち側のプロジェクト委員の合同会議で話し合われ運営される。

二回の実施とも、最後には、活動の報告・発表をする会を設けた。ただし、年度最後の発表会だけは三年生も参加し、互いの活動を認め合うとともに次年度の活動への意欲を高める場にもしている。

⑵学びの姿

ＦＳＰの時間になれば、子どもたちは自ら自分の活動場所へ行き、自分の計画に沿って各々の活動に取り組み出す。

Ｂさんは、廊下にテーブルを持ち出し、壁にタブレットをセットし卓球のサーブ練習をした。Ｗｅｂ上の情報をもとに動画も参考にしながら、納得いくまで練習を繰り返していた。

【写真３】

Ｃさんは、映画の『ジュラシック・パーク』をイメージした作品作りに取り組んでいた。コイルを100個以上自作し理科で学んだ電磁石の性質を使って、恐竜の模型が動く仕掛けを作っていた。実際には、なかなか思うように動かなかったが、動く原理を学び直したりコイルや電池の配列を何度も試行錯誤したりしていた。ＦＳＰは、年間計画では夏季休業や年末・年始休業を含むように配置されている。それにより、授業時間として使えるのは20時間だが、長期休業中の課題にすることも可能で納得いくまで継続して活動に取り組むことができる。

【写真４】

ＦＳＰのような活動は、以前から様々な学校で行われてきたが、子どもたちが取り組む内容の数だけの指導者（外部講師）を確保することに難しさがあった。しかし、手元にタブレットがあることにより、ある程度までは一人で学ぶことが可能になった。

⑶子どもの評価

ＦＳＰに係るアンケート調査も、グーグルフォームを活用し実施した。ＦＳＰに取り組んだ四年以上の子どもたち全員をアンケートの対象とした。

その結果は、次表の通りであった。

ＦＳＰについても、９割を超える子どもたちが「楽しい」と感じている。その理由として自分で自由にテーマを決め、好きなことに

一人でじっくりと取り組み、必要に応じて仲間と学び合うことができることを挙げている。

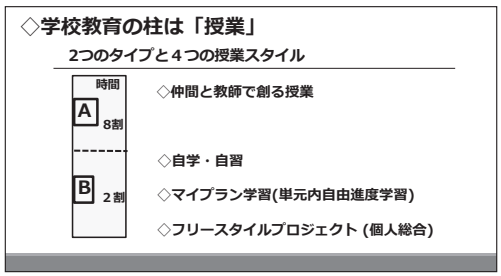
「自分でする授業」の質が高まり、こうした学びは今後の「探究型の学び」にもつながっていくと考えられる。

◇「子どもへのアンケート」より
①ＦＳＰは楽しかったですか。
・楽しく学ぶことができた・・・・・・・・・・75%
・どちらかといえば楽しく学ぶことができた・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20%
・どちらかといえば楽しく学ぶことができなかった・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2%
・　楽しく学ぶことができなかった・・ 3%
②（「どちらかといえば」を含めて）
楽しかった理由は何ですか。（複数回答可）
※理由として挙げられた上位４位までは以下の通りである。
・自分の好きなことにじっくり取り組むことができたから・・・・・・・・・・・・・・・・・66%
・自分のテーマを自由に決めることができたから・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64%
・自分のしたいことに一人で取り組むことができたから・・・・・・・・・・・・・・・・・・28%
・仲間と協力して活動することができたから・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25%

５.「４つの授業スタイル」について

「子どもがする授業」の具現化に向けて、「自学・自習」「ＭＰ学習」「ＦＳＰ」の三つの授業スタイルを導入してきた。

天童中部小学校では、いわゆる通常の授業を「仲間と教師で創る授業」とし、上記と合わせ下図のように「２つのタイプ・４つの授業スタイル」を設定している。



子どもたちにとって自由度が高く、自ら学ぶことを実際に体験する授業（Bタイプ）と通常の授業（Aタイプ）の時数的な割合はおよそ２：８とした。

大きく二つのタイプに分けられる授業スタイルは有機的に関わり、相乗的に効果を上げていく。Bタイプの授業では、個に応じた学びの充実が協働的な学びを生み出していく姿が見られる。こうしたことは、一つの単元・時間という枠組みを超え、どちらかといえば個別に学ぶことに重点が置かれているＢタイプの学びの充実が、どちらかといえば協働的な学びに重点が置かれるＡタイプの学びの充実につながっていると考えられる。

このことを明らかにするため、ＦＳＰを導入しＢタイプの授業が整った年度末（2022年３月）に、子どもと教師にアンケート調査を行っている。

a）子どもたちへのアンケート

Q．Ｂタイプの授業をすることで、Ａタイプの授業への取り組みが変わったと思いますか。（対象；３年生以上全員）
A．変わった　26%
どちらかと言えば変わった　46%
どちらかと言えば変わらない　17%
変わらない　11%

「どらかといえば」を含めて「変わった」と答えた子どもたちには、「どのように変わったと思うか」という問いも出している。

その結果は、「計画的になった」という答えが突出して多く、回答者の６割を超えていた。次いで、「ノートの取り方を工夫するようになった」「深く考えるようになった」「仲間の話をよく聞くようになった」と続いていた。これまで見てきたように、自分で計画を立て個別で学ぶことに重点が置かれているBタイプの学びの充実には協働的に学ぶことが欠かせず、個の学びの充実が集団の協働的な

学びの充実につながっていることを学習者である子どもたちも意識していることが分かる。

b）教師へのアンケート

Q．Bタイプの授業をすることで、Aタイプの授業への取り組みが変わったと思いますか。（対象；教務及び全担任）

A．変わった	53%
どちらかと言えば変わった	47%
どちらかと言えば変わらない	0%
変わらない	0%

回答した全教師が「どらかといえば」も含めて「変わった」と答えた。教師には、どのように変わったかを自由記述するよう求めた。

その結果、子どもたちの変化として「見通しをもって計画的に学ぶようになった」「粘り強くなった」「自分のペースで学ぶようになった」などを挙げていた。教師自身の変化としては、「子どもの話をよく聞くようになった」「子どもたちが自分のペースで学ぶことを受け止められるようになった」「板書を工夫するようになった」などを挙げていた。

こうした中で、「教材研究の大切さ」を痛感している教師が多かった。ある教師は、「子どもが自分で学びを進める力がついている分、「この程度の授業だったら先生がいなくてもできるよ」と感じる可能性は十分にある。だからこそ、Aタイプの授業では、子どもたちが学び合いながら、子どもたちだけでは辿り着くことができないところまで導くことを目指して、一つ一つの授業を丁寧に考えるようになった」と記述していた。

c）それぞれのアンケートからの考察

有能な学習者として子どもたちを信頼し、自由度の高い個別な学びを積極的に取り入れることにより一人一人の学ぶ力が高まり、集団としての協働的な学びも一体的に充実していく。

こうした「子どもがする授業」の積み重ねによって、先に述べた合言葉の通り、子どもたちは「私たち教職員のいないところでも学び合うことができるようになり」、持続可能で多様性と包摂性のある「幸せにくらすことができる」社会の創り手となっていくのである。

6．天童中部小学校の「４つの授業スタイル」への挑戦に対して

では、天童市立天童中部小学校の「令和の日本型学校教育」の構築をめざす学校」としての挑戦は、これから教師を目指す者にどのようなことを考えさせるのだろう。

そこで、筆者（小幡）は、奈良女子大学附属小学校や愛知県東浦町立緒川小学校での実践、学びの共同体での取り組み等についての知見を有さないが、今夏、フィンランドの教育視察に同行した学生（３年ゼミ生）と同行しなかった学生（３年ゼミ生）に、天童市立天童中部小学校の取り組みを読ませた。そして、それに対して、どのようなことを考えるのかを探ることにした。

a）同行しなかった学生の記述

学生Aは、「個別最適な学びは、自分で計画し、選択して学んでいくというイメージをもっていた」、「自学・自習で子どもが授業をするという実践があったからこそ、ＦＳＰにつながったことが大きい」、「ＭＰ学習では、とことん追究することができることが良いと思った。『分からない』を残さず学習することができると思った」と記述した。

学生Bは、「ＭＰ学習について、教師は学習の手引きを作成し、子どもに示すとあったが、すぐに学習が終わってしまう子にはどのような対応をしているのだろう」、「ＭＰ学習もＦＳＰもアンケートの中に、楽しくなかったと回答した人がいた。なぜ楽しくなかったのか気になり、知りたい、もし私が小学生だったら魅力的で楽しいと感じる、趣味が学校

でできるという素晴らしさ」と記述した。

学生Ｃは、「授業のやり方をかえれば、児童にとって個別最適な学びになるのか、普通の授業の時よりも楽しいと感じた児童の割合が多ければ楽しくないと答えた数%の児童はどうするのか」と記述した。

学生Ａ・Ｂ・Ｃは、天童中部小学校の４つの授業スタイルとは異なる、教師主導の授業スタイルの中で被教育期を学び、教育者としての立場に身を置く段階を迎えている。そのため、これまでの自身の授業観の基盤にして天童中部小学校の４つの授業スタイルの情報を探っている。そして、それを、自身がこれから立ち向かう授業づくりの方法に、どのようにつながるか、どう生かせるかといったことに眼を向けていると言えよう。

ｂ）同行した学生の記述

今夏、フィンランドの教育視察に同行した学生Ｄは、第一に、「子どもがする授業は、受けてきた授業という概念を根本から覆すもの」と記述した。そして、「いつまでも先生と呼ばれる人がいないということを本当の意味での『自分のことは自分でやる』であると感じたと述べる。（この背景には、フィンランドでは18歳になると、例えば親ですら子どもの貯金通帳を見れなくなるといったように、自立した生活が始まるという話が大きく関与しているようである）

第二に、「子どもたちだけで授業を進めることの不安はつきものであるが、その不安が進歩を遅らせてしまっている」と記述した。そして、「天童中部小学校では『とりあえずやってみよう』と始めていた、この『やってみよう』はフィンランドの学校でも見ることができた、何かを新しくしたりアイデアが思い浮かんだら悩むのではなく、とりあえず『やってみよう』といろいろなことが学校現場で導入されていた、日本の教育に足りないと思っていた『やってみよう』の精神が芽吹いているのにとても感動した」と述べる。

つまり、自立した生活者を育てるというフィンランドの教育に接したことにより、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」が、どのような子どもを育てることにつながるのかを、現実としてとらえることができるようになったと言えよう。

その結果、被教育期を経て教育者としての立場に身を置くことを前提として、これからの「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を図る教育の目指すことや在り様に眼を向けるようになったと考える。そして、そこから、天童市立天童中部小学校の挑戦を肯定的にとらえることに前向きとなっていると考える。

第三に、「先生がいなくても授業ができることに対して子どもが『いつもやっているよ』との返答が返ってきたことに感動した、それがあたり前だから何もすごいことはないんだよの意味が込められているのではないか」と記述した。そして、「『子曰く、学びて思わざれば即ち罔し、思いて学ばざれば即ち危うし』自由進度学習では子どもが自ら学ぶという姿勢が元からある状態で学習が進んでいく、学びとは教えてもらったことを自分の中に落とし込んでからであると孔子が『論語』で言っているが、この学習法だとそれが同時進行で行うことができると考えた」と述べる。

つまり、「４つの授業スタイル」のベストミックスの効果にまで眼を向けるようになったと考える。

７．おわりに～まとめと今後の課題～

「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」の先行となるフィンランドの教育の様子を見聞したもう一人の学生Ｅは、「ＭＰ学習における、一緒の空間にいつも各自が自分のペース、順番等を決めて学習するという雰囲気は、個別最適な学びを保障するだけで

なく、学びにおける、子どもの安心感を保障するものとなる」と記述した。

この記述から、天童中部小学校の取り組みには、守屋が指摘する「一人一人の子供を主語にする学校教育の姿」、「『子供たちを支える伴走者である教師』」、「学校の『居場所としての福祉的な役割』」等が確認できる。

しかし、現在の日本の教育は、まだ、学びは『個』のものであるという教育観の理解や『個別最適な学び』と『協働的な学び』の適切な実践が日本の教育界で行われるような状況とはなっていない。天童中部小学校のような取り組みが増えていくことによって、「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識し、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるような資質・能力の育成」を目指すことが求められているのである。

1）守屋淳「『令和の日本型学校教育』の奇妙さについて ―『個別最適な学び』に着目して―」北海道教育学会『教育学の研究と実践　第18号』，2023年，p12-19

2）守屋淳，前掲書，2023年

3）山形県天童市立天童中部小学校。筆者は平成30年度から令和３年度まで校長として勤務した。本稿は主に天童中部小学校の令和３年度の実践について書かれている

4）佐野亮子「単元内自由進度学習における学習環境に関する考察―協働による実践『チャレンジタイム』の事例分析を通して―」個性化教育研究 10，2019年，p18